

平成22年6月13日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18320118
 研究課題名（和文） 近現代中国江南の総合的研究—近100年間の人材的政治経済的発展
 基盤
 研究課題名（英文） Historical Research on Human Resources in 20th-Century Jiangnan,
 China: Politics and Economy
 研究代表者
 高田 幸男（TAKADA YUKIO）
 明治大学・文学部・教授
 研究者番号：90257121

研究成果の概要（和文）：中国江南地方（上海および江蘇・浙江両省を中心とする）の過去100年間の政治的変容と経済的発展の社会的基盤、とくにマンパワーの歴史的蓄積に着目し、総合的に分析をおこなった。中国の南京大学・浙江大学と共同で、両省各地の元企業経営者・元技術者・元教員に対するインタビューから1940～50年代の同地方の状況を分析し、また1910～20年代の地域エリートの日記からその政治的空間や人脈の広がりを解明した。さらに、江南地域史研究と地方史料をめぐってシンポジウムを開催した。

研究成果の概要（英文）：We analyzed social, cultural base of Political transformation and economic development of China Jiangnan area in 20th-century, especially focused on human resources.

We interviewed former business administrators, former engineers and former schoolteachers under the cooperation with the Nanjing university and the Zhejiang university, and analyzed the situation in this area in the 1940's to 50's. And analyzed the diary having been written by local elite in Jiangnan from 1910's. to 20's, clarified the extension of the political space and networks of him. We also held the symposium concerning the oral Jiangnan area study and local historical materials.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,700,000	0	3,700,000
2007年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2008年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
総計	13,800,000	3,030,000	16,830,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国、近代史、現代史、地域社会史、人材育成、地域開発、史料学、国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

上海を中心とする江南地方は、現在、中国

の経済成長の牽引力となっている。その基盤は明清時代までの発展を大前提に、清末に始まる近代商工業の導入、南京国民政府期の産業育成など、近代以降の社会変容のなかで培われた。とくに人材育成や人的ネットワークの形成は物質的基盤と同様に重要である。従来の研究においては、政治史や経済史、教育史など個別分野で検討されてきたが、人的ネットワークが分野を超えて相互にどのように結びついているかは、明確にされておらず、総合的に研究する必要が生じていた。

また、開始当時、中華民国期と中華人民共和国期の継承と断絶の問題に対して実証的な研究が進展していた。人材育成・人的ネットワーク形成も長時間を要する事象であり、その総合的研究は、清末から人民共和国期に至る継承と断絶の問題に対しても貢献することが期待された。

さらに、人材育成・人的ネットワーク形成の解明に当たっては、聴き取り調査を実施することにした。近年、オーラルヒストリーにもとづく近現代史研究が盛んであるが、その対象は、政治指導者や特定の事件の当事者・目撃者、農村社会など共同社会の成員が中心で、企業経営者・技術者・教員など地域社会の指導層や中堅人物に対する聴き取り調査はあまりおこなわれてこなかったためである。

2. 研究の目的

本研究は、江南地方の発展を、過去 100 年間の江南地方の経済的発展、政治的社会的変容という長期的な文脈のなかでとらえ、そうした発展・変容の社会文化的基盤、とくにマンパワーの歴史的蓄積に着目し、総合的に分析することによって、現在進行中の当該地方における改革開放の歴史的考察・将来的展望に資することを目的とする。

具体的には、中央一省・市一県・市一郷・鎮という多層構造のなかで、政治・経済・社会諸分野における人材がどのように掲載され、またネットワークを形成してきたのか解明することに重点を置く。

さらに、中国との共同による聴き取り調査を実施する、中国の地方史研究者の協力を得て、未公開史料を含む地方史史料を発掘・利用するなど、新たな研究方法を開拓していくことも目指す。また、こうした作業を通じて、若手研究者を含めた日中の研究協力態勢を構築することも目的とする。

3. 研究の方法

(1) 中国の研究者との共同による聴き取り調査。

緻密な地域史研究、とくに当事者に対する聴き取り調査おこなうためには、現地研究者の協力が不可欠である。そのため本研究にお

いては、南京大学および浙江大学と共同研究をおこなうこととした。初年度に、南京大学歴史学系および浙江大学中国近現代史研究所と共同研究の協定を結び、学術情報の提供から調査の実施および調査結果の整理に対して協力が得られることになった。

江蘇省の調査に対しては南京大学の、浙江省の調査に対しては浙江大学の協力を得て調査地点を選定し、それぞれ 1940、50 年代の地方企業経営者や工場技術者、学校教員経験者に対して聴き取り調査をおこなった。インフォーマントは、中国側協力者を通じて手配し、あらかじめ調査の趣旨を伝えたのち、現地協力者の手配した会場で聴き取りをおこなった。

2007 年度の江蘇省各地における調査は、1 回に 5 人前後を集めて聴き取りをおこなったため、各人の経歴を十分に聴き出すことができなかった。そのため、2008 年度の浙江省における調査では、各回 2~3 人とし、かつ事前に個人の簡単な経歴を提出してもらい、その上で、聴き取りをおこなったため、江蘇省における調査に比べより多くの情報を得ることができた。

これらの記録は、江蘇省・浙江省とも、録音とメモにもとづき非公開の冊子にまとめた。

(2) 未公開の地方史史料の講読・分析。

聴き取り調査によるオーラルヒストリーのみならず、近年の近現代史研究では、従来使用されなかった史料の開拓が進んでいる。本研究では、中国上海図書館所蔵の『農隱廬日記』の講読会を組織し、その講読と分析を進めた。『農隱廬日記』は、清朝末期に商部（日本の経済産業省に相当）の官僚だった王清穆が残した手書きの日記で、1916 年から 1940 年までの 24 年間で現存している。この日記を講読し、その内容を分析した。

(3) 地方史研究や地方史史料をめぐる情報交換・議論

江南地方を中心とする地方史研究の新たな地平を切り開くため、地方史研究の進め方や新たな史料の開拓・活用法に関して情報交換や討論の場を設定した。

4. 研究成果

(1) 聴き取り調査。

2007 年 8 月 27 日から 31 日まで、江蘇省蘇州市、崑山市、常熟市、呉江市、および無錫市で計 32 人に対して聴き取り調査をおこない、2008 年 8 月 26 日から 29 日まで、浙江省杭州市、蕭山区、淳安市、および紹興市で計 39 人に対して聴き取り調査をおこなった。

インフォーマントの内訳は、元小中学校教員・校長が崑山 5 名、常熟 5 名、呉江 5 名、

無錫 12 名、杭州 6 名、蕭山 4 名、淳安 6 名、紹興 11 名の計 54 名、元商工業経営者・店員・技術者が無錫 5 名、杭州 2 名、淳安 3 名、紹興 4 名の計 14 名、元地方幹部・農村幹部が淳安 3 名で、各地の元教員のなかにも商工業や農村工作の経験者が含まれている。

その内容は、彼らの出生時の家庭環境・社会状況から、受けた教育、就職の経緯、就職後の業務まで、とくに抗日戦争や内戦期、人民共和国成立後の工作、社会主義化やソ連型教育の導入などの状況に及び、江南各地における人材養成や社会変容についての貴重な証言を得ることができた。

これらの記録は、整理して 2 冊の調査記録にまとめた。だが、内容が個人情報に関わるため、現在のところ、公開していない。今後、これらの記録を学術研究に供するため、公開・利用の方法を検討する必要がある。また、江蘇・浙江両省とも 4～5 カ所での調査にすぎないため、さらに調査を続行し、各調査地区の特徴や共通性も析出する必要がある。

(2) 未公刊史料の講読・分析。

『農隱廬日記』は、1916 年旧暦 5 月から 1917 年同 2 月まで、1919 年同 1 月から 1921 年同 3 月分までの講読と分析をおこなった。

毛筆の字体に慣れることから始まり、次々に登場する膨大な数の人名の同定作業などもあって講読は難航しているが、現在、内容の電子データ化とその日本語訳を進めるとともに、並行して人物索引の作成も進めている。

これまでのところで判明してきたことは、1915 年に退官し崇明島に帰郷した王清穆が、所有地の木綿などの品種改良を進める農業改良家、郷里崇明島の名士としてだけでなく、紡績工場の株主、江蘇省の名士、元中央官僚など、さまざまな顔を使い、各レベルで活発な活動を展開していることである。上海はもちろん、妻の実家のある蘇州とも頻りに往来し、必要に応じて首都北京まで行き、各界名士たちと連絡を取り合い政治的・社会的活動を展開している。

こうした活動は、江南地方のみならず中華民国期の政治・社会構造を反映したものであり、王清穆の人脈や活動範囲の分析は、中国地域史研究に大きく寄与することが期待できる。したがって本研究終了後も、引き続き講読・分析を続けるとともに、さらにこれらの成果を公刊する必要がある。

(3) 地方史研究や地方史史料をめぐる情報交換・議論

①2007 年 3 月 20 日・21 日に中国杭州市の浙江大学で学術交流会を開催し、中国側協力者である南京大学・浙江大学の地方史研究者と討論をし、また、杭州市の浙江図書館古籍

部を訪問し、今まで日本の研究者に利用されることが少なかった同図書館に、浙江省各地の地方文献が大量に所蔵されていることを確認した。

②2007 年 8 月の江蘇省における聴き取り調査の際、8 月 28 日に旧呉県の公文書を所蔵する蘇州市呉中区档案馆を、同 31 日には、無錫図書館と無錫市档案馆を訪問し、地方史料の所蔵状況と公開状況について調査した。とくに無錫市档案馆では湯可館長と会見でき、無錫の商工業関係文書の収集と民族工商業档案馆の新設について貴重な情報を得た。

③2008 年 6 月 21 日ワークショップ「オーラルヒストリーと中国現代史研究—技法・記録・語り—」を東京の東洋文庫にて開催し、2007 年の江蘇省調査の経験を踏まえ、諸分野から中国で聴き取り調査をおこなっている研究者と調査方法やその利用法などをめぐって意見・情報交換をおこなった。

④2008 年 8 月の浙江省における聴き取り調査の際、8 月 27 日に淳安県図書館を、29 日に紹興図書館を見学し司法文献の所蔵状況を調査した。また、8 月 30 日には浙江図書館古籍部を再訪して蔵書調査をおこなった。

⑤高田幸男は浙江大学の招請で、2008 年 9 月 25 日・26 日杭州市で開催された「漢学研究と中国社会科学の推進」国際シンポジウムの「地方史研究と新史料の発掘」部会に出席・報告し、浙江を中心とする地方史史料について意見・情報交換をおこなった。同 27 日・28 日に他の出席者とともに、浙江省龍泉市档案馆を訪問し、地方裁判所の裁判文書のデジタル化作業を見学し、さらに松陽県石倉村で最近公開された過去 300 年間の契約文書を見学した。

⑥2009 年 12 月 19 日、以上の成果を総括するため、明治大学で国際シンポジウム「江南地域史研究と新史料」を開催した。当日は、本研究の中国側協力者 5 名を招聘し、成果の一端を発表するとともに、今後の課題について議論した。

⑦その他にも、地方史研究を含めた中国近現代史研究や史料をめぐる研究会を多数おこなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 46 件)

① 高田幸男、近代教育と社会変容、飯島

- 渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ 20 世紀中国史』東京大学出版会、2009、pp.125-144、査読有
- ② 高田幸男、近代中国の大学と地域エリート—三江師範学堂・東南大学の事例研究一、アジア教育史研究第 18 号、2009、pp.1-12、査読有
- ③ 田中比呂志、飯塚靖、小浜正子、川尻文彦、久保亨「江南百年プロジェクト杭州会議 研究計画報告」、『近きに在りて』第 52 号「特集：江南百年の研究」、pp.83-89、2007 年、査読無

[学会発表] (計 30 件)

- ① 高田幸男「江南科研の概略・成果・課題」、国際シンポジウム「江南地域史研究と新史料」、2009 年 12 月 19 日、明治大学駿河台校舎
- ② 小野寺史郎、小浜正子「王清穆『農隱廬日記』の紹介」、国際シンポジウム「江南地域史研究と新史料」、2009 年 12 月 19 日、明治大学駿河台校舎

[図書] (計 11 件)

- ① 久保亨、土田哲夫、高田幸男、井上久士、東京大学出版会、『現代中国の歴史—兩岸三地 100 年のあゆみ』、2008 年、288 頁

[その他]

ホームページ等

<http://homepage2.nifty.com/jn100/>

2008 年度より

<http://jn100.exblog.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 幸男 (TAKADA YUKIO)
明治大学・文学部・教授
研究者番号：9 0 2 5 7 1 2 1

(2) 研究分担者

金子 肇 (KANEKO HAJIME)
下関市立大学・経済学部・教授
研究者番号：7 0 1 9 4 9 1 7
川尻 文彦 (KAWAJIRI FUMIHIKO)
帝塚山学院大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：2 0 2 9 9 0 0 1
中村 元哉 (NAKAMURA MOTOYA)
南山大学・外国語学部・准教授

(3) 連携研究者

井上 久士 (INOUE HISASHI)
駿河台大学・法学部・教授
研究者番号：3 0 2 8 6 1 0 8
(H18→H20：研究分担者)

久保 亨 (KUBO TORU)
信州大学・人文学部・教授
研究者番号：1 0 1 4 3 5 2 0
(H18→H20：研究分担者)
小浜 正子 (KOHAMA MASAKO)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：1 0 3 0 4 5 6 0
(H18→H20：研究分担者)
田中 比呂志 (TANAKA HIROSHI)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：9 0 2 6 9 5 7 2
(H18→H20：研究分担者)
佐藤 仁史 (SATO YOSHIFUMI)
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：6 0 3 3 5 1 5 6
(H18→H20：研究分担者)